

アサリ資源の繁殖保護に取り組んで

小野田漁業協同組合青壮年部
西村 広司

1. 地域および漁業の概要

私たちの小野田漁協は、山口県内海の南西臨海部に位置するセメントの街として知られている小野田市にある。市の地形は西と南が海に開け、市街地のほとんどが平地であり、気候も温暖で自然災害も少なく、緑あふれる住みやすいまちである。(図1)

当漁協は組合員数66名で、主な漁業種類は底曳網、流し刺網、潜水器漁業やのり養殖等である。平成6年度の組合総水揚げ高は約2億7,600万円で、アサリ等貝類が約30%、のり養殖約20%、カレイ・アナゴ等鮮魚類約10%、その他約40%となっている。(図2)

2. 研究グループの組織と運営

青壮年部は昭和40年に結成され、部長外3名の役員を置き、現在21名の部員で構成されており、漁港周辺の月1回の清掃活動やクルマエビの種苗放流、「小野田漁協ふれあい朝市」への参加等の活動を行っている。

また、ほとんどの部員がアサリを対象とした潜水器漁業に従事している。通常アサリと言えば「潮干狩り」が頭に浮かび、干潟域でとれるものとのイメージが強いが、私たちは沖合の水深約6mの漁場に生息しているアサリを対象として操業しており、底曳網やノリ養殖と並ぶ冬場の安定した主幹漁業のひとつとなっている。

3. 研究課題選定の動機

この潜水器漁場に、昭和60年頃からヒトデが集まりアサリに被害を与えるようになってきた。操業時に漁場の状況を見ると、ヒトデに食べられたアサリの殻が散らばり、そしてヒトデを手にとってみるとほとんどがアサリを抱えて食べている最中という状態であった。

このまま放置するとアサリの被害が大きくなり、何とかしなくてはならないとの強い危機感が私たちの間で生まれ、丁度、内海西部地区の青壮年部集会で「アサリとヒトデの学習会」があり、これに参加して「ヒトデ対策」について話し合った。学習会終了後さっそく部員全員で検討した結果、ヒトデ駆除に取り組むことになり、「ヒトデの多い場所に自分達で潜って取れるだけ取ろう」ということになった。

4. 実践活動状況

最初のヒトデ駆除は昭和60年5月に2日間行い、4隻の潜水器漁船で合計約300キ

口の量のヒトデを駆除した。取り上げたヒトデは、堤防や組合前の広場に干して近所の農家に肥料用として配布したが、ヒトデを干すときの臭いの問題もありたくさんは干せないことから、昭和62年から市の協力を得て、一定量以上のヒトデは全て焼却場で処分してもらえることになった。以後毎年、11月から4月までの漁期中にヒトデが多ければ、そのつど駆除を行いヒトデによる被害を防いでアサリの繁殖保護に努めてきた。

ところが、平成5年度の漁期に入り今までにない大量のヒトデが発生し、多い所では海底に絨毯を敷いたように2重3重にヒトデが重なり合い、相当量のアサリが被害に会っていることが確認された。

そこで、すぐにヒトデの大量発生対策について部員全員で話し合った。しかし、あまりにもヒトデの量が多いので「数が多すぎて潜りじゃ取りきれん」との意見が多く出た。いろいろ協議した結果、効率的にヒトデ駆除ができる小型底曳網漁船による駆除を検討してはどうかとの結論になった。

さっそく、組合に相談し、底曳網漁業者全員に集まってもらった。私たちから底曳網での一斉駆除をお願いしたところ、底曳網業者からも操業時にヒトデが網に多く入りこまっているとの意見も出て、ヒトデを駆除することはお互いのためになり、また組合の水揚げ向上に役立つとの理解が得られ底曳網での一斉駆除を快く承諾してもらうことができた。

しかし、駆除を行う場所は底曳網の禁止区域なので、駆除作業については誤解が生じないように、あらかじめ組合を通じて近隣の関係組合に了解を取り、海上保安署へ作業届を行った。(図3)

駆除作業は5隻の作業船と2隻の運搬船で行うこととし、稚貝放流場所を重点的に駆除することにした。また、駆除作業の実施費用は青壮年部で協議した結果、私たちが所属している潜水器実行組合にお願いして、放流用稚貝の購入費として積み立てている資金から支払うことになった。

いよいよ平成6年2月23日から駆除作業を開始した。駆除開始当初は網を10分も曳くと船上に揚げられないほど網一杯にヒトデが入り、1日1隻当たり約800キロ、5隻で約4トンもの量を駆除する日が続いた。さすがに底曳網の人たちも想像していたよりはるかに多いヒトデの量を目の当たりにして、改めてヒトデによるアサリの被害の大きさを実感したようだった。

私たちが毎日陸揚げされたヒトデをトラックに積んで市の焼却場へ運ぶのに幾度も往復して大汗をかいたが、「往復すればするほど、それだけアサリが守られる」との思いで、みんなで協力して運んだ。

3月に入りようやくヒトデの量は1日当たり約1トンと減少し始め、やがて網に入らなくなったので3月19日に一斉駆除を終了した。駆除の延べ日数は20日間で、駆除したヒトデの量は合計50トンにもなった。

しかし、平成5年度の組合のアサリ水揚げ金額は大量のアサリが被害にあったため、約730万円と、最悪の状態となった。(図4)

ただ、駆除後にヒトデに食べられずに生き残った稚貝も見られ、また他県からアサリ種苗を購入して放流を行い来漁期に備えることにした。

やがて待ちに待った平成6年度漁期が近づいてきた。漁期前の試験操業の結果では、稚貝は順調に生き残っているようで、私たちも一安心したが、全体的に小型のアサリが多く、例年どおり11月から操業を開始してもアサリが小型で身入りも悪いため、漁期の見直しについて私たちから潜水器実行組合に相談した。

その結果、身が十分入ってサイズも揃い値のである時期に操業したほうが良いとの私たちの意見が通り、開始時期を例年より1カ月ずらして12月から5月までの漁期とし、サイズが揃い身入りが良くなるまで漁獲量の制限を強化することとした。(図5)

1日1隻当たり17キロ入りの一斗缶で42缶という制限を設けて4月まで漁獲を続け、サイズが揃い身入りも良くなった5月になって、潜水器実行組合と相談して62缶に制限を緩和した。

ところが、漁期終了間近になって、底曳網や建網漁業者から操業中にヒトデがまた網に掛かるようになったとの話が出始めた。再びヒトデがアサリ漁場に集まって来る可能性があるため、昨年同様底曳網漁業者に依頼して6隻で一斉駆除を行った。

駆除は平成7年5月15日から4日間行い、合計約6トンのヒトデを駆除した。(図6)平成6年度の漁期は終わってみれば春先に成長したアサリの漁獲や平成5年度のヒトデ駆除の成果で好漁となり、組合のアサリ水揚げ金額は前年度と比較して約1.2倍の8,700万円位となり、近年減少を続けていたアサリ漁獲高を好調だった頃並まで回復させることができた。(図4)

こうして私たちは、平成6年度でヒトデ駆除の効果を身をもって実感できたことから、今後は種苗放流やヒトデ駆除だけでなく、他の管理手法とあわせてアサリの資源管理に取り組もうとの意識が高まってきた。

そこで青壮年部でアサリ漁場の監視や定期的な漁場調査を行い、それに基づいて害敵駆除や缶数制限を提言するなどアサリ資源管理に積極的に取り組んで行くことになった。

まず、漁場の監視については、他地区からの密漁という問題も残念ながら過去から続いているため、アサリ漁場の密漁監視を青壮年部が当番制で毎日24時間行うことになり、これで漁期終了後のアサリ漁場の監視体制が整った。漁場調査については、その具体的な方法について水産試験場に相談した結果、水産試験場・水産事務所と一緒に毎月2回のサイクルで潜水調査を行うことになった。漁場に定点を設けヒトデの状況やアサリの大きさ、身入り、へい死状況等の調査を平成7年7月から10月まで延べ6回行った。(図7)

調査の結果、調査期間中どの定点でもヒトデは見られず、アサリの生息も多い地点では1平方メートル当たり4,000個に達しており、異常へい死も見られなかった。

また、大きさは平均殻長34ミリ、最大47ミリ最小8ミリで、同一場所に稚貝と成貝が入り混じって生息しており、資源的にも有望であると推測された。

これらの調査結果から判断すると、今年度の漁期はアサリの水揚げが十分期待できそうな状況であるが、せっかく順調に成長してきたアサリなので有効に利用するため、漁期の調整や缶数制限等の管理を続ける必要がある。

そこで私たちから今後の操業について組合や潜水器実行組合に相談したところ、漁期は昨年度の実績から身入りの悪い11月は操業せず、12月から5月とすることで一致した。缶数制限については一部から昨年度漁期末の62缶制限よりもっと増やしたいとの根強い

意見も出たが、私たちの資源管理に取り組もうとの熱意に理解が得られ、今漁期は昨年度並の60缶制限で操業することになった。

また、組合から流通面での改善対策として、アサリの販売単価をアップする努力が必要であるとのアドバイスを受けた。これまで消費者からは「小野田の沖合アサリは身が良く入っていて美味しい」と好評の割には価格面での努力に欠けていることに気づいた。

そこで、「自分達が育てたアサリ」を少しでも単価アップできるように、「通し目」を大きくし、殻長30ミリ以下のアサリはとらないようにし、サイズを揃え安定供給するという条件でアサリ取扱い業者と交渉した。

その結果、昨年度漁期には1缶2,800円だった単価を、今年度は4,000円にまでアップすることができた。また、今後もアサリ取扱い業者と定期的に交渉の場を持ち、出荷方法の改善に努めて単価の見直しを行うことになった。

5. 波及効果

こうして、私たちの地道な活動により、少しずつではあるがアサリの資源管理に向けて潜水器実行組合全体での取り組み体制が整いつつあり、組合員全員に資源管理意識が浸透しつつある。(図8)

たとえば、ヒトデ駆除については、一斉駆除だけでなく「ヒトデ持ち帰り運動」として日常の操業時に行うよう、他の漁業種類の人たちにも働きかけたところ、すでに一部の漁業種類で取り組みが開始され、着実にその輪が広がって来ている。

6. 今後の課題

今思えば、青壮年部として常に全員で何でも話し合い、その解決のために一丸となって行動していくことが資源管理には大切な事だと実感している。

現在アサリの水揚げは当初の予想どおり好漁が続いている。

今後は組合や関係機関と一緒にあって、更に効率的で有効なアサリ資源の管理に取り組み、干潟のアサリとは違う沖合でとれる美味しい「小野田のアサリ」を山口県の特産品としてブランド化できるよう努力し、これを契機に他の魚種の資源管理にも取り組んでいきたいと考えている。

図1 小野田漁協位置図

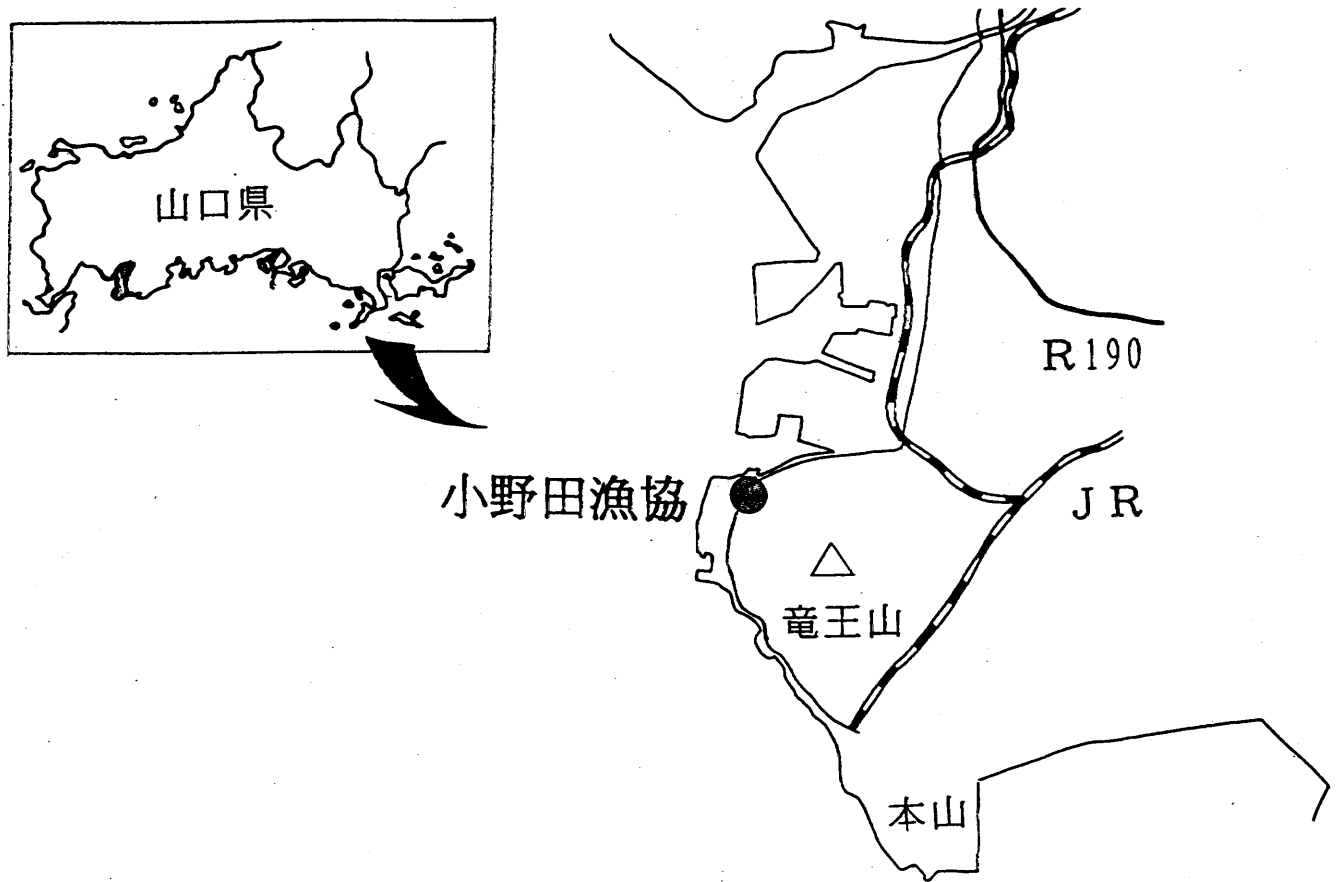


図2 平成6年度組合総水揚高
27,600万円

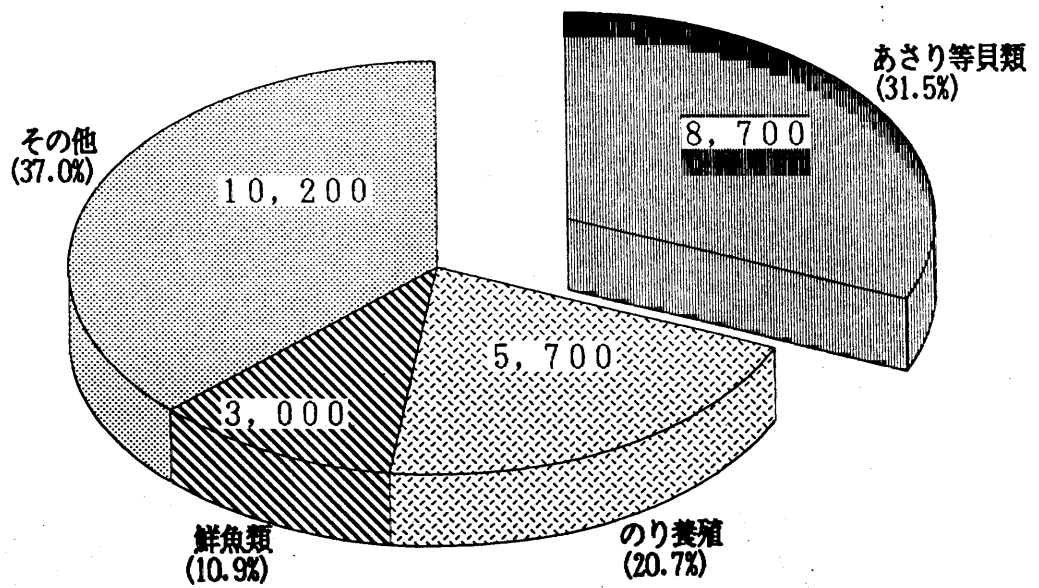


図3 平成5年度ヒトデ駆除範囲

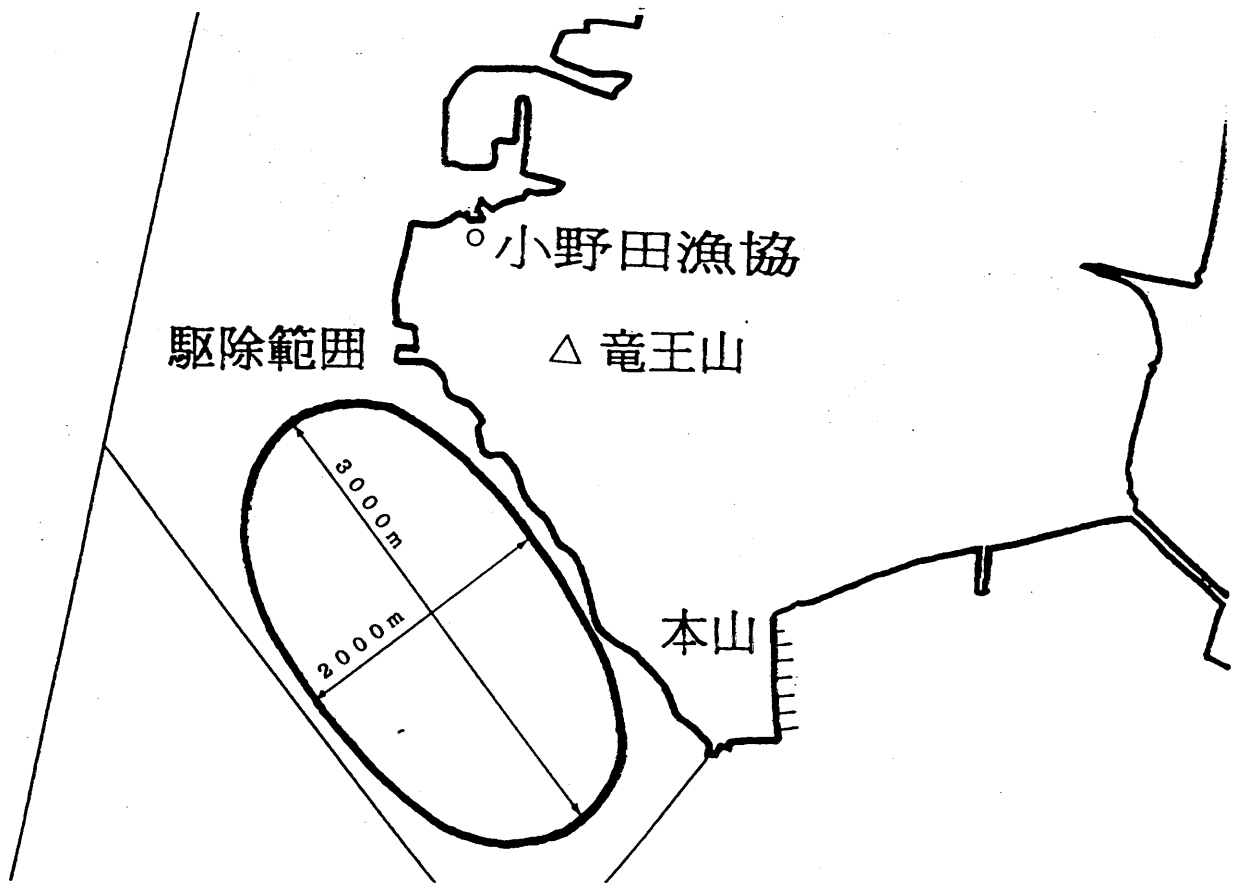


図4 アサリ年度別生産金額

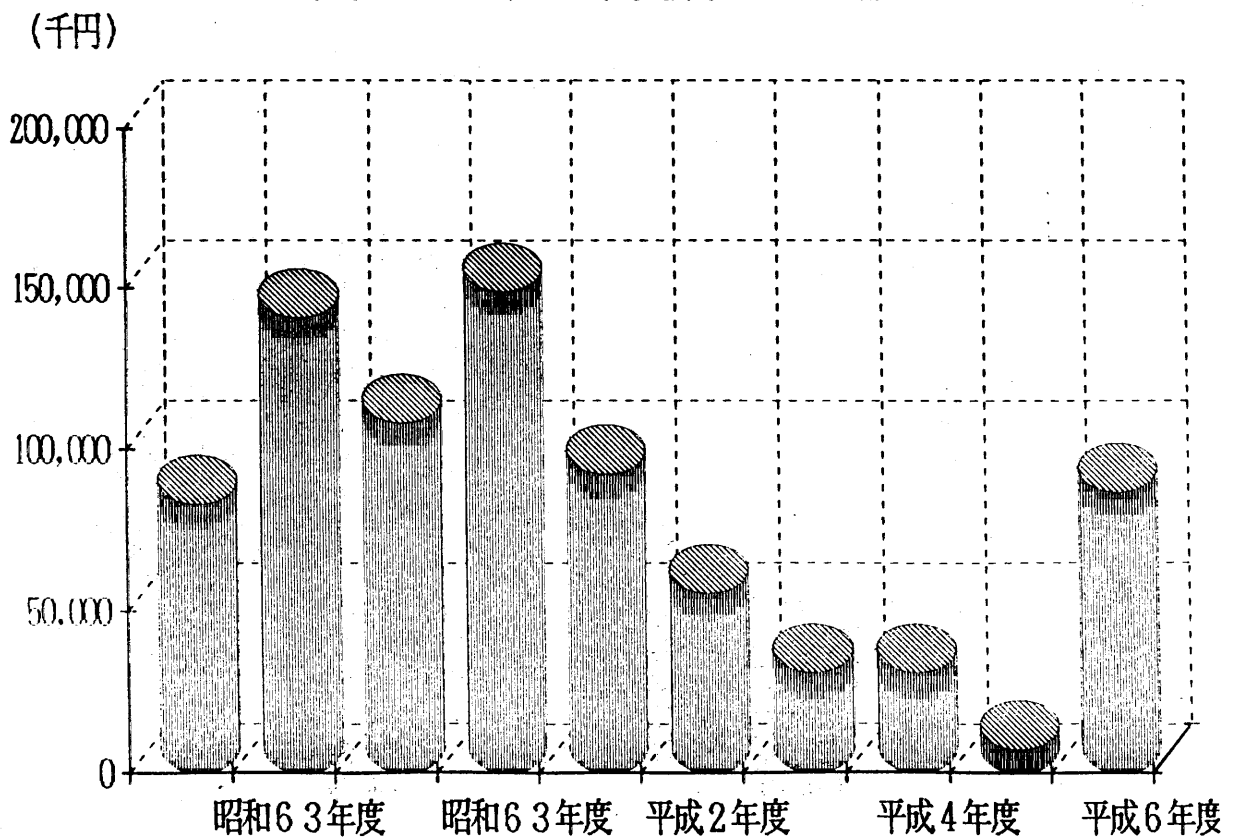


図5 漁期とアサリの身入り

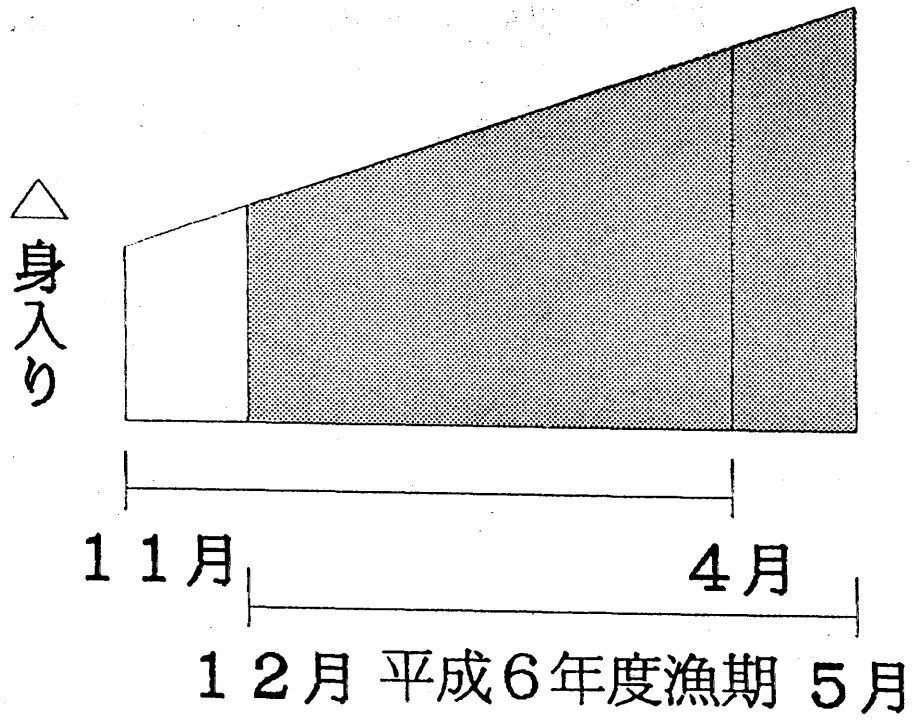


図6 平成6年度ヒトデ駆除範囲

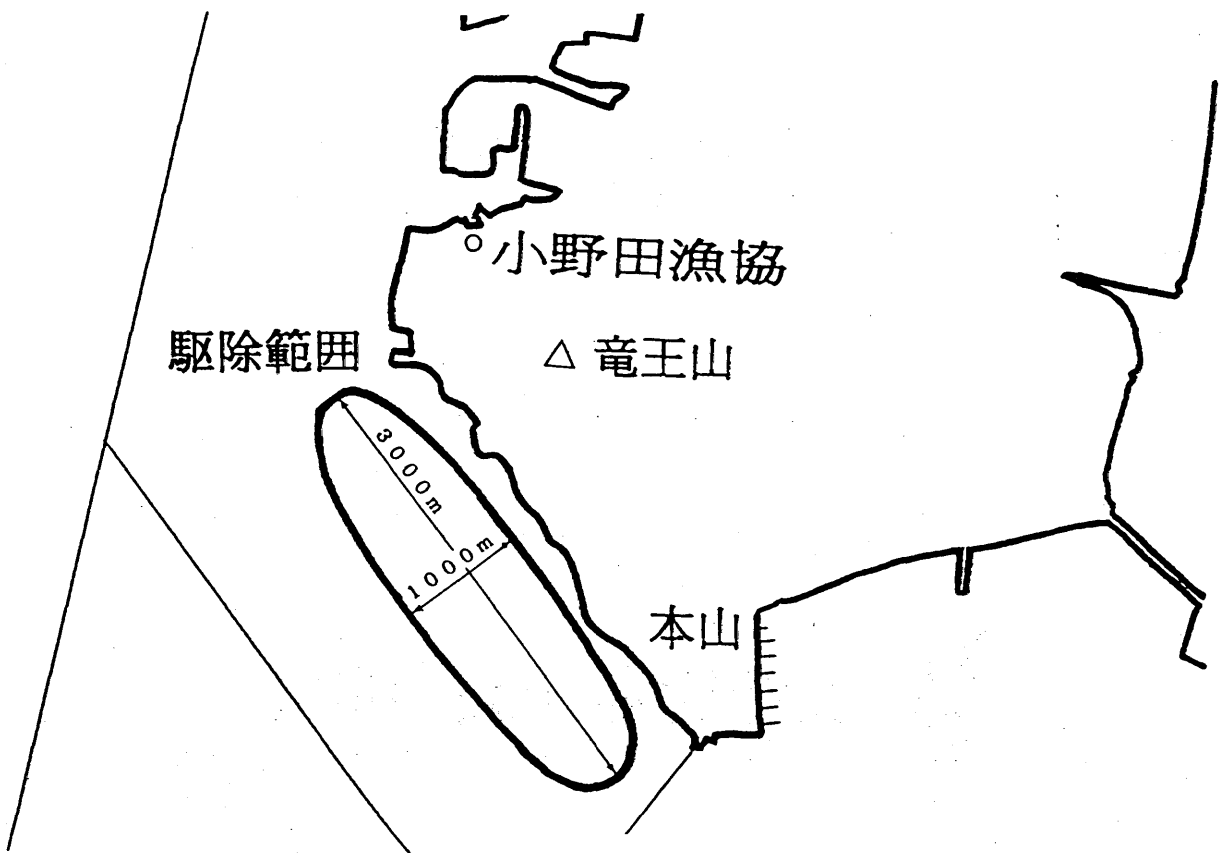


図7 アサリ調査位置図

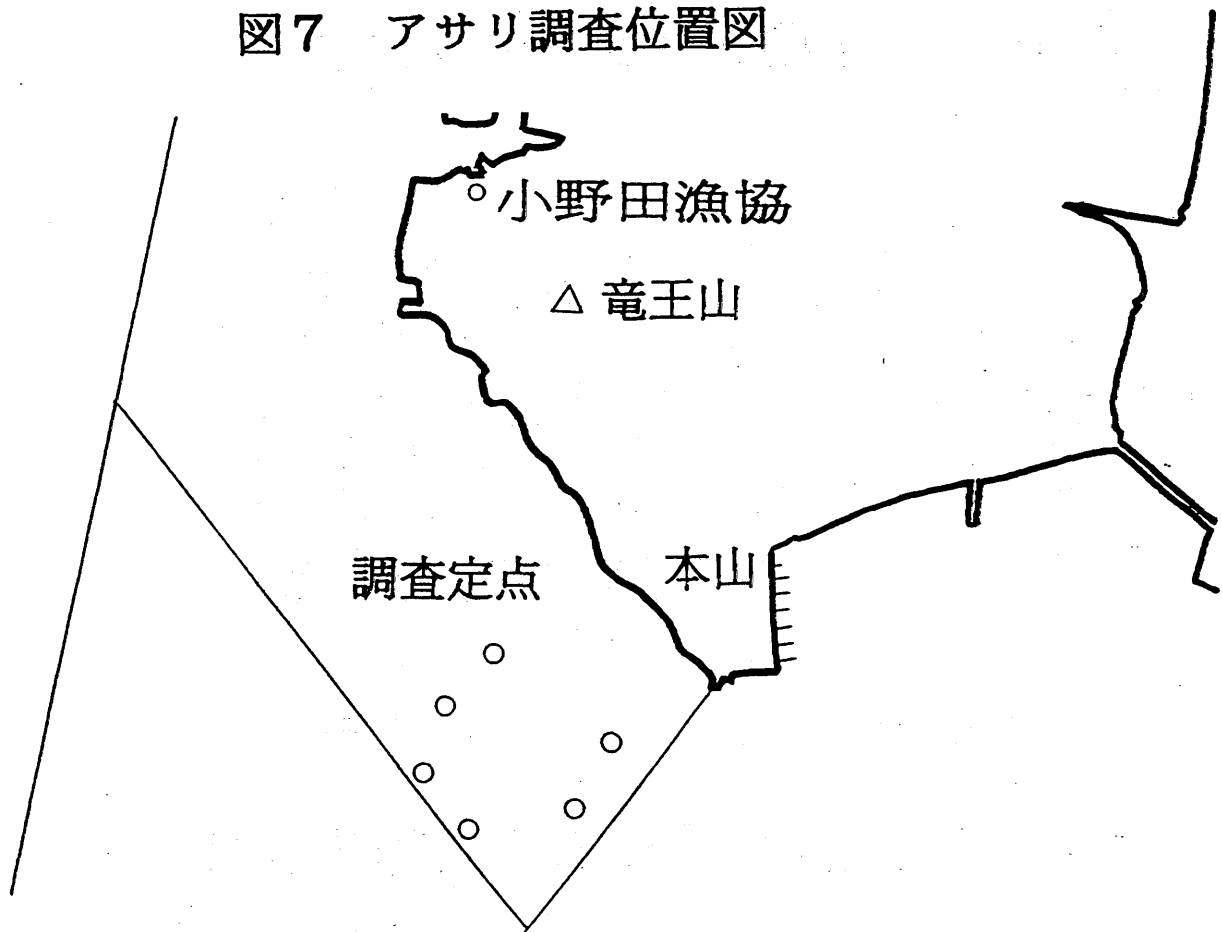


図8 意識の向上

